raising sun ―ライジングサン―

月音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｒａｉｓｉｎｇ　ｓｕｎ　―ライジングサン―

【Ｎコード】
Ｎ７１９４Ｚ

【作者名】
月音

【あらすじ】
プロローグ

――西暦三〇一〇年。

四つの大陸に分かれた大地『パンゲア』は……剣、魔術、科学の三つが交差する地。
そこでは、『国家騎士団』、『国家傭兵団、『帝国軍団』という、三つの組織が支配する世界。
騎士は名誉と誇りのため、傭兵は力と欲のため、帝国は勢力と権力のため、互いに異なった思いを寄せながら、その刃を振るう。

これは、そんな戦場の地にて紡がれた、太陽のような眼差しをした、一人の若き傭兵の物語――。

ライジングサン

battle 1　デイ・ウォーカー～日の下を歩く者～

燦々と輝く真昼頃。
紺色のコートを羽織り、背中に火炎剣（フランベルジェ）を背負う黒髪の少年『日野神太陽』と、彼と同じコートを着用し、長剣を腰に装備した赤髪の少女『霜月明日菜』の二人組は、とある任務にて小さな町に赴いていた。

「ここか……コロネっつー町は。しっかし、随分とまた辛気クセー町だなぁ」
「人が居ないね……」

辺りを見渡すが、人気が見られない。そればかりか、窓やカーテンがしっかりと閉められている。目を合わせたくない、誰かと接触したくない。それ故の行為なのだろう。
すると突然――。

ドンッ！

「うおぉっ！？」

太陽にぶつかって来た一人の老人。怒ることなどせず、太陽は老人に手を差し伸べた。

「大丈夫ですか？」

「立てるか？　爺さん」

「あ……ああ……。大丈夫……」

しかしこの老人、彼らを見るなり、ビクビクと震え上がっている。まるで自分たちを怖がっているかのように。

そんな老人を安心させようと、太陽が声をかけて宥める。

「落ち着け爺さん。俺らは傭兵だ。騎士なんかじゃねぇ。……この有り様は何なんだ？　この町で、一体何があった？」

「……」

老人は呼吸を整えると同時に、二人に語り出した。

「全て……帝国の……仕業なんだ」

「！？」

老人は、人が居なくなったのは帝国のせいだと言う。

さらに老人は、話を進める。

「元々帝国はあんなんじゃあ無かった！　あの男が来てからだ！この町が可笑しくなったのは！」

「爺さん。そいつぁ誰なんだ？」
「……アッサム＝フォンバットという名だ」
――アッサム＝フォンバット。『帝国軍』の現役隊長であり、『召喚剣士』の一人。
老人の話によると、アッサムは二ヶ月ほど前に、コロネの町へやってきたらしい。
その男は隊長格。自分の抱えている兵を引き連れ、町を自分の支配下に置いてしまった。それだけではない。
税の払えぬ者を連行し、牢獄に入れる始末。町の市長でさえ手に負えなくなっている状況だという。町の人達は震撼し、アッサム軍に怯えながらの生活を強いられるようになった。

「頼む！　アッサムを！　奴を殺してくれ！　奴さえ殺してくれるだけでいい！」
「根城は何処にあんだ、爺さん」
「北の方にあるが……君達、まさか！」
「親玉をぶっ潰す！　だからここで待ってろよ、爺さん」
「行こう、ソル！」
「無茶だ！　二人であやつらに立ち向かうなんて無謀だ！」
明日菜の声で、太陽と明日菜は一緒に北の方角へと走り出す。
老人は二人を引きとめようと手を差し出すが、しだいに姿は遠くなっていった。

太陽と明日菜は城門の前へと到着した。門の前には兵が二人。守りは薄そうだ。
二人は木陰に身を隠しながら、コソコソと接近。背後から峰打ちを食らわす。そして気付かれること無く、何とか二人は城内への侵入に成功したのであった。

一方、敵側では――。
「隊長！　ご報告申し上げます！」
「騒々しいな……まぁいい。申せ」
血相を抱えて報告に参った兵の一人が、アッサムに話しかけた。
「朱色（あけいろ）の剣を持った黒髪の少年と、弓を使う赤髪の少女が、城内に侵入したとのことです！」
「……兵の状況は？」

「ほぼ……壊滅の危機に陥っております……」
「仕方ない……わたしも出向くとしよう……」

迫り来る兵を次々と薙ぎ倒し、太陽と明日菜は地下牢へとたどり着く。
牢の先には、子連れの母親から、中年の男性や年寄りなどが入れられていた。
鍵を開けている最中、「助けてくれ坊主！」「こっちにもお願いだぁ！」といった、五月蝿いほどの大声が耳に響く。
当然、見捨てはしない。太陽は少しペースを上げ、急ぎ気味に全ての鍵を一つ一つ開けて回る。
そして最後の鍵を開け終え、太陽はふぅっと一息。

「お疲れ、ソル」
「一つ一つ鍵開けんの疲れたな～。後は、アッサムっつー奴を潰して――」
その時だった！
「アッサム＝フォンバットというのは、わたしの事かね？」
「！　出やがったな！」

背後からの声に、二人は振り向く。
案の定そこへ立っていたのは、元凶であるアッサム。青色の長髪、緑色の瞳、そして老けた中年の顔立ち。紛れもなく本物だ。

「よく来たね、傭兵諸君」
「残念だったな、隊長さんよぉ。人質は全員解放した。後はテメェだけだ！」
「くはははははは……分をわきまえん小僧が、偉そうな口を叩きよるわぁ！　――【フォノン】！！」

アッサムの掌からは、火の玉が渦を巻くように、燃え盛っている。
その火の玉を、アッサムは太陽に向けて放った。

――だが。

「炎で俺が負けるか！　馬鹿がぁ！」

太陽は迫り来る火の玉へ、手を前に出し、力を解き放った！

「【炎の壁（フレイウォール）】！」

渦巻く炎の弾丸と燃え盛る炎の壁がぶつかり合い、振動と爆風を同時に生み出す。その僅かな隙を狙い、太陽と明日菜は地上へと階段を上っていった。
アッサムも同様に「逃がすか」と煙を払いのけながら、二人の行く先を追う。

道中、下級兵やアッサムとも接触することなく、二人は何とかして城の外へと脱出する。
だがその時だった！　二人の目の前には、アッサムの部下が横一列に並び、武器を構えていた。

「ここまでだな……。貴様らをここで仕留めてくれる！　かかれぇ！」

アッサムが手を前へ出すと同時に、手下の軍勢が一気に二人の方へ直進する！

「アスナ！　援護頼むぜ！」
「うん！　任せて、ソル！」

明日菜は両手を前に出して素早く術式を読み上げる。そして、少数の兵目掛けてその呪文を放った！

「――【エアロ・マラン】！」

両手から放たれた暴風の球は、向かって来る軍勢へと降りかかる！

「ぐあぁぁぁ……！」「うわあぁぁぁ……！」

断末魔と同時に、アッサムの手下は見事に全滅。次々とうつ伏せに

倒れ伏していく。中級呪文だけあって、威力も桁が違う。

「ぐっ……！　無能共め……！」

「テメェの軍はもうお陀仏だ。残ってるのはもうお前だけだぜ？」

「一人だと……！？　ふはははは、笑わせてくれる！　この力がある限り、わたしは最強なのだ！　見せてやる、我が召喚獣を！　来い！　――【タウロス】！」

アッサムが指を鳴らすと同時に、二本足で歩く猛牛の化け物が、太陽の前へと現れた。

両手には岩石をも容易く破壊するであろう、大きな戦斧（せんふ）が握られている。

「おぉ、デッケェなぁ……。流石に、丸腰は完全に無理だよな。こいつを使うか！」

背中にある火炎剣を両手に取り、太陽は【タウロス】を睨み付ける。

その時、アッサムは太陽の剣を見た瞬間、驚愕し出す。そして、不敵な笑みを浮かべると、突然太陽の正体を口にする。

「先ほどの、詠唱破棄での術の発動……朱色の剣『火炎剣――フランベルジェ』。そうか……貴様は『デイ・ウォーカー』！　『国家傭兵団』の……【日野神太陽（ひのがみたいよう）】！！」

「『デイウォーカー』はあんまし言われねぇけどな」

「そうか……貴様が持っていたか。――火炎剣『フランベルジェ』。並み居る敵を一薙ぎで燃やし尽くす豪剣！　良い物を持っている！　殺した上で奪ってやろう！」

「けっ……やって見ろよ！」

火炎剣を握り、太陽は目の前に居る【タウロス】に斬りかかった。

ガシャン！　ガシャン！

ご自慢の俊敏さを活用し、【タウロス】を後退させていく太陽。【タウロス】も、戦斧を振るう余裕が無く、太陽の攻撃をただ防ぐばかり。

そして遂に【タウロス】は憤怒の表情を見せ、戦斧を太陽の頭上へと降ろす。

だが――。

スッ！

岩砕の一撃を、太陽は横へと素早く回避。

斧を振り切った隙を見計らい、太陽は左腕に狙いを定め、力いっぱいに火炎剣を振るう。

「ぜぇやあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

――ザンッ！

左腕がゴトンと落ちたと同時に、鮮血が一気に噴き出す。

深い傷を手で押さえ、「ウガアアァァ！」と悲鳴を上げる【タウロス】。その姿に、太陽は止めを刺そうと接近する。

【タウロス】もブチ切れたのか、片手で斧を取り、太陽に襲い掛かった。

だが、その攻撃も空しく――。

「【紅蓮斬】！」

火炎剣が振られたと同時に、剣に纏っている紅蓮の炎が、【タウロス】の体を容赦なく焼き尽くす。
そして【タウロス】は悲鳴のような断末魔を上げ、手にしている武器とともに消し炭と化した。アッサムの握っている召喚石が、下僕の死を知らせるが如く、音を立てて砕け散る。

「う、嘘だ……！？　わたしの【タウロス】が、こんな傭兵のガキに……！？　ぐぅっ……くそ……くそおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

召喚獣を倒され、慌てふためくアッサム。
冷静さを失い、ただ乱心に身を任せ、ロングソードを太陽に向かって振るいまくる。だが、動きは至って『ド三一（さんぴん）』。全て太陽の剣で防がれている。
攻撃をかわし切り、ガードの空いた顔面に、太陽は渾身のアッパーカットを一発。仰け反るアッサムに追い討ちを掛けるが如く、更に続けて腹にローキックをお見舞いする。
仰け反り、跪くアッサムを見下ろすかのように、太陽は火炎剣の切っ先を、奴の喉元へと宛がう。

「もう観念しろ。テメェの負けだ」
「観念だと……？　嘗めたことを……。あきらめん……。わたしはこれしきの事では諦めんぞぉ！」

アッサムはそう言い、目くらましの魔術【闇雲（ダーク・スモーク）】を使うと、そのまま太陽の元を立ち去ってしまう。
太陽も追いかけようとするが、煙幕が彼の視界を阻むため、足取りを追うことが出来なかった。

「ぐぅ……。傭兵なんぞの力に頼らずとも、街一つぐらいは制圧出来る！　人を殺めて金（きん）を肥やす殺人鬼の威を借りるなど、騎士の名折れだ！」

太陽からの追っ手を振り切り、アッサムは路地裏へと逃げ込んでいた。

息を切らしながら、跪き、壁に手を当てて呼吸を整える。だが、そんなアッサムの疲労状態にも関わらず、彼の目の前に、白銀色の髪を靡かせ、右手に太刀を携えた一人の女が立ちはだかる。

「……こんな馬鹿が国家を支える柱とはな……。こんな奴が騎士か……取るに足らない存在だな」

「！　貴様は【紫電の女王】の……『霜月瑠華』！　くくくっ……覚悟おおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

「分を弁えろ……下種が！――【飛竜剣――旋風】！！！」

真正面から迎え撃つアッサムに対し、瑠華は冷徹にも刃を横へ一薙ぎする。

刹那――。

ブシュウウウウゥゥゥゥゥ！

「ごぼぉっ……！」

腕、足、胴体に刻まれた傷。それと同時に、傷口から鮮血が水しぶきの如く噴出する。

そしてアッサムは、口から血の塊を吐き出すと、剣を握ったまま前のめりに突っ伏し、そのまま息絶えてしまった。

「貴様如き、私の相手にもならないんだよ……」

アッサムの死を確信し、瑠華は刃に付着した血を拭い、太刀を鞘に収めると、路地裏を何事も無いような顔で、その場を立ち去っていくのであった。

◆

「ご苦労だったね。太陽くん。明日菜ちゃん」

「俺らは何もしてません。アッサムを殺ったのは『ウチ』の隊長様だ」

「そうです。私のお姉ちゃ……いや……隊長です」

「お姉ちゃんで良い。それより、人質を解放しただけでも十分な手柄だった。良くやったね」

本部に帰還し、総督に功績を称えられる太陽と明日菜。
彼の名は『神谷厳道』。四四歳。温厚であり厳しい者であり、傭兵団の指揮を取る者として動いている者である。

――『国家騎士団』と『国家傭兵団』と『帝国軍団』。国家を支える三つの柱が、ここ『パンゲア』の世界に存在している。
本隊に入るにはまず『瑠王学院』に入学する必要がある。
入学資格を与えられるのは十二から十五までの少年少女。
試験の内容は単純で、筆記と実技のみ。面接は無い。ただし、本格的に見られるのは、やはり実技面だ。
まず新入生は、入学時に学科を選ぶ。そして、必要以上の単位を取り、十六から二十歳までに卒業資格を得て、本隊に入ることが目的の教育組織なのだ。
尚、二十歳までに学院を出れなければ、入隊の意思が無い者とされ、退学処分とされてしまう。

入隊後は各それぞれの小隊に配属され、指揮官の元に動く。
それが彼らの進路なのだ。

「報告書出来上がりました。総督」

アッサム討伐依頼の報告が書かれた書類。太陽はそれを厳道にすっと渡した。
報告書を拝見し、神谷は「確かに受け取ったよ」と笑顔を交わす。
そして、用事を終えた太陽と明日菜は「失礼しました」と声をかけ、司令官室を後にした。
明日菜と並んで歩いている途中、暇そうに太陽がぼやく。

「さぁて、仕事終わったし……。どうしようかね……」

「う～ん……。そうだソル！　私の知ってるケーキ屋さんがあるんだけどね」
「そのケーキ屋何処にあんだ？　答えろ」
太陽は見かけによらずデザートが大好きな『スイーツ系男子』なのである。
ケーキ屋という単語に、素早く反応する太陽。咄嗟に食いついてくる太陽に、明日菜も少々苦笑する。
「焦らないで、ちゃんと教えるから。『ルドルフ』っていう店なんだよ」
「『ルドルフ』……早く行きてぇー！　アスナ、早く行こうぜ！」
「うん！　行こ行こ！」
子供のようにはしゃぐ太陽の後を、明日菜は喜びながら彼についていった。

◆

一方その頃……。アッサムの死を電話で聞き、密かにほくそ笑む少年がいた。その隣に少女もいる。

少年の方は『野宮理人』。緑の短髪に高価な眼鏡を掛けた、インテリを思わせる容姿。
もう一人の少女の方は『森上神流』。鼠色の長髪に、レイピアと幅の大きい盾を携えた少女。

「はい……。はい、分かりました……」

ブツンッ。

「リヒト、どうしたの？」
「カンナ……アッサムが死んだらしいよ」
「知ってる。微かだけど、電話の声が聞こえたわ」
「呆気ない最後だったらしいよ。全く、国軍の隊長とあろう者が情けないね」
「仕方ないわよ。相手は先輩だったんだから。それに、日野神君や霜月さんもいたんですってね」
「日野神……あいつはぼくたちで倒さなきゃならない！」
「それはわたしだって同じよ。人を殺める事に躊躇いの無い殺人鬼は――わたしたちで始末する！」

ライジングサン

ｂａｔｔｌｅ　２　　ノース大陸の地

――第二土曜日の朝十時半頃。
太陽と明日菜の二人は今日、『国家傭兵団』本部にある司令官室に呼び出されていた。

「せっかくの休日を潰すようで悪いのだけれど、任務に行ってきてくれないかな？」
「全くだ。毎週土曜は『デザートの日』って決まってたのに、仕事で潰されたんじゃ世話ねぇですよ」
さぞご立腹状態の太陽。横で明日菜も苦笑している。そんな彼の機嫌を取ろうと、神谷はあるものを机の上に置いた。
「休みの日に、妻と子供を連れて旅行をしてきたところでね。よかったら食べるかい？」
机の上に置かれたカステラを目にした直後、太陽と明日菜二人の思

考回路が爆発。
咄嗟にカステラへと手を伸ばすが、神谷は「駄目だ駄目だ」と箱を上に翳す。

「任務から帰って来たらの話だよ。行ってくれるね？」
「はい！　任務とは何でしょうか、神谷総督！」
「『効果はばつぐんだ！』か？　まぁ、取り合えず本題に入ろう」

神谷は両手を組みながら二人を見据え、今回の任務を語り始めた。

「北のノース大陸にあるロッカ村が、ここ半年に渡って盗賊の被害にあっている。自警団さえも手に負えない程の集団でね。二人だと流石にリスクが大きいんだよ。そこで今回、八小隊の桐戸君と風斬君の二人と同行してもらいたいんだ」
「ジークと零士か……しゃーねぇ。早いとこ終わらせるか、明日菜」
「あぁそれと、一団の中に『召喚魔術師』が紛れているという報告があるから。それに気を付けて」
「分かりました」
「はい。分かりました」

太陽と明日菜は了承すると司令官室を後に、駅方面へと出かけていったのであった。

――駅にて。
「待たせたな。レイド、ジーク」
「良いよ。僕達も今さっき来た所だから」
「早く列車に乗りてーぜぃ！」
「お前はただ駅弁が食いてーだけだろ！」

太陽と合流した二人の傭兵。
右側にいる、青い髪の少年が『風斬零土（かざきりれいど）』。六小隊所属であり、太陽と同じ魔剣士クラス。
そして、零土の横にいる無造作に広がった金髪頭の少年が『桐戸滋郁（きりとじいく）』。剣士でなく、学院唯一の格闘クラス。両手に巻いているギプスが何よりの証拠だ。
四人は早速合流すると、少し早歩きでノース大陸行きの列車へと乗り込んだのであった。

西のウェスト大陸を発って四時間が経過――。
太陽達一行は汽車を降り、神谷から貰った地図を頼りにして、村を探しに森林の道を歩く。道中、太陽と滋郁の『乗り物酔い』による吐き気の催しにより、何分かの休憩を取ることとなった。

歩き続けて三〇分……。太陽達はようやくロッカ村へと辿り着く。木で積み上がったログハウス。怯えながら、体を丸めて佇む子供の姿。厳道が言ったとおりだ。盗賊のせいで、村一面が荒地と化している。

行き交う人達の目も死んでいる。何とも酷い荒れようだ。太陽達は情報を集めるために、村長の家へと訪れたのであった。

「はるばる来てくれてありがとう、傭兵さん方。わたしが、村長のレイル＝ウィルバークだ」

「日野神太陽だ」

「霜月明日菜です」

「風斬零土です」

「桐戸滋郁だぜぃ！」

「ああ、よろしく」

「さぁて、自己紹介は置いといてだ。この村がどうなってるのか、教えてくれねぇか？」

「順を追って話そう」

そして、村長は語り始めた。

「半年前……この村に盗賊が来るようになったんだ。それも毎日のように。幾度も幾度も脅かされて、我々はとうとう我慢できず、帝国に申請したんだ。だが、奴等は自分達のスポンサーだと言ったんだ。盗賊に手を出せば、帝国への反逆罪として捕縛、もしくは処刑すると……」

「……最早帝国じゃねーな、そいつら。仕方ねぇ、俺らでそいつらを――」

「あんたたちじゃ勝てないよ。帝国を潰す？　馬鹿馬鹿しい」

太陽が後ろを振り向くと、そこに痩せ型の少年の姿があった。歳は

太陽達より年下。推定一三〜四ほどだ。
少年は太陽の言葉を聞くなり、皮肉を言い出す。
「力を持っていたって、どうせ仕返しが来る。何もしない方が一番手っ取り早いんだよ」
だが、ただ黙っているだけの太陽ではない。子供であろうと容赦せず、太陽は少年に言いたい事を言ってやった。
「何もしねぇよりマシだろう。ただ殴られるばかりじゃ、俺だって胸くそ悪ぃし。仕返しできねーぐらいにガキ大将を思いっきりボコりまくりゃいい。俺だったらそうするね」
「傭兵なんて、皆アンタみたいな奴ばっかりなのか？　……汚らわしいな」
「おいクソガキ……もう一度言ってみろおぉっ！！」
嘗めた口を利きやがったクソガキに対し、俺は大声で怒鳴った。その隣で、レイドやアスナが俺を止めようと、仲裁に入る。
「や、止めときなよソル君。気が立つのも分かるけど……」
「怖がっちゃってるよ、あの子」
レイドとアスナに引き止められたと同時に、村長はガキに話しかける。
「ニッケル、お客様に失礼なことを言うな！」
「……」
村長がそう言うと、ガキは怯えながらさっさと二階へと上がっていきやがった。全く……変なガキだ。感じ悪ぃったらねぇよ。

「あのガキは何なんだ？　村長さん」
「ニッケルはわたしの孫だ。今は娘のリャーナと二人暮らしをしている」

あんたのお孫さんでしたか。まぁ、似たような感じはしてたけどな。話の流れからして複雑な事情を持っていそうであったため、太陽はこれ以上追及をしないでおこうと、話を勝手に終わらせた。
すると、太陽は何かを思い出したのか、村長に再び尋ねた。

「村長。盗賊が毎日のように来るっつー話なんだけどよ。大体いつも何時ぐらいに来てんだ？」
「夕方の一六時から……一七時の間だ」
「お日さんの沈むころか……。明日菜、カステラの方は明日になるかもしれねぇ。ここで一泊するしかねーみたいだ」
「うぅ……。分かったよ、ソル」

アスナが俺の前で、しょ気た顔を見せる。ごめんな、一日だけ我慢してくれ。
俺だってお前と同じ気持ちなんだよ……。

時計を見るとちょうど一五時ジャスト。今から作戦を練れる時間帯。余った時間で、太陽は三人を呼び、居間を借りて共に策を作り始めた。

現時刻一六時一〇分。もう盗賊の来る時間帯だ。

二手に別れ、太陽と明日菜は東の門、零士と滋郁は西の門へ護衛に着く。
しかし、待っていても一向に来る気配がない。太陽の方も段々とストレスが溜まってきている状態。
明日菜もその場でしゃがみ込んだり、滋郁の方も退屈そうに大欠伸をする始末。
その時だった。

ゾロゾロ……。
案の定、盗賊のお出ましだ！　しかもマッチョばかりの肉体派ばっかりだ。

「おれたちに二人がかりで相手か！　無謀なガキ共だ！」「そこまで死にたいなら、逝かせてやるぜ！」

むさ苦しい野郎共は俺らを見ると同時に、鉈（なた）を片手に多勢で襲ってきやがった。
よっしゃあ！　来やがれっ！

「【炎の包囲網（メラ＝サークル）】！」

術式を解き終え、敵の周りを火炎で囲む俺。俺の魔力に呼応し、炎が轟々と燃え盛っている。
そのまま立て続きに、俺は次の術式を唱えた。両手から炎の色を放ち、俺はその両手をまた地面に付ける。

「【劫火灰塵（エクス＝プロード）】！」

村の門前に固まっている盗賊の軍勢は、劫火灰燼の炎に飲まれ、一瞬にして消し炭と化す。

門を突っ切ってくる野郎共。だが、そんな多勢なぞ気にせず、ご自慢の攻撃呪文を使い、進行を阻めるアスナ。

「【エアロ＝マラン】！」

おぉ。お得意様の風魔法か。

放たれた風の球体が一直線に、敵の方へと迫り来る。

巻き込まれた取り巻きが次々に、大きく吹っ飛ばされていった。

（可愛い顔してるやつほどエゲつい事するってのはこういうことだな……。やっぱり姉貴の受け売りなんだろうな……）

俺は一瞬だけ、アスナの姿を恐ろしいと思った。

その頃、零土と滋郁の二人も激戦中であった。

双剣を両手でいなし、敵を薙ぎ倒していく零土と、武器を持たず、己の腕力と素早い脚力で相手を一網打尽にする滋郁。

太陽に負けず劣らずの俊敏さと連係を併せ持っている。

「【竜円舞――弧月】」

双方の剣を、弧を描くように回転させ、そのまま敵に攻撃！
零士を囲んでいた四人ほどの下っ端が、一瞬にして地に伏せた。

「【龍帝拳】！」

気孔を使った滋郁による拳技。下っ端の一人の腹に、その拳が、深く抉り込まれるように打ち付けられる。
下っ端は吐しゃ物を散らし、前へつんのめった。
その直後、滋郁に奇襲を掛けようと、二人の下っ端が背後から襲い掛かる！
だが――その刹那。

「【風迅・旋風脚】！」

両手を軸とした回転蹴りが炸裂！
二人の下っ端は剣を振る間もなく、滋郁の技をまともに食らい、大きく宙に舞う。

手を休めることなく、盗賊を打ち倒していく太陽、明日菜、零士、滋郁の四人。
進行阻止の戦いが始まって三十分後……。

「た、退避だあああぁぁぁぁぁ！！」「わあああぁぁぁぁぁぁ！！」「くそっ！　なんてガキ共だ！」「おれたちの手に負えねぇ！」「引き上げるぞおおおぉぉ！」

盗賊団は太陽達四人に恐れをなし、背を向けて逃げていったのであった。

◆

――その晩。
飯を食い終えた俺ら四人。小さな居間で、俺は明日菜、零士、滋郁の三人とのんびり寛いでいた。

「今日の戦は雑魚ばっかりだったな」
「うん……疲れちゃったね～！」
「みんな息荒かったね……」
「オイラ、もう動けねーぜぃ！　腹がいっぱいで！」
「それは飯の食い過ぎだろーがぁ！」

剣に砥石を当てながら、俺は三人と喋っていた。
すると、レイドが突然語りだした。

「ソル君。とりあえず、今日の一日は何とか撃退に成功したけど、問題はその後……だよね？」
「ああ。俺らは今日、あの連中を潰した。そうなると、あいつらを雇っている親（帝国の野郎）がココにやって来る可能性がある。単に言えば『子供の喧嘩に親が出る』ってヤツだな」
「だったらよ、そいつらも今日みてーにまたオイラ達で！」
俺の会話に突然、ジークが割って入ってきた。両手で拳を作って素

振りしながら、張り切っている。
当たり前の事を抜かしてくれる……。でもまぁ、同感だけどな。

「司令官殿によると、ボス猿が一匹別に居るんだとよ」
「ボス猿……。ソル、そいつぁ一体何なんだよぉ？」
「……召喚師がいる。しかもB級……って話だ」
「そんな奴が召喚獣を出したら、村一面ぶっ飛んじまうぜぃ！」
「憶測だよ憶測。断定は出来ねぇけど、そう聞いただけだ」

……まぁ、ぶっ叩くことに変わりはねぇんだけどな。
その召喚師を潰す……そこが問題になってくる……。
と、その時だった。

ガチャッ。

ドアを開けて居間に入ってきた村長は、俺らにそのまま話しかける。

「傭兵さん方、今日はありがとうよ」
「夜中になって突然、敵襲なんてことも在り得るから。村長さんも気を付けて」
「うむっ」

頷くと同時に、村長は悲しそうな表情になりだした。
何か言いたそうだな……。俺は村長に「何かあるのか？」と尋ねた。
そして、村長は重い口を開けて喋り出す。
その会話の内容は――ニッケルの過去だった。

――ニッケルが十二の時。
彼の父リグルは勇敢な男だった。
特別な力を持っている訳でもなく、騎士や傭兵などのお偉いさんだ

った訳でもない。ごく普通の村人だ。
だが、彼の村人よりも勇気があった。
向かってくる山賊や魔物を自警団とともに退治し、村を守っていたのだ。
ニッケルはそんな背中を見て、将来父のようになりたいと思った。
信頼される英雄に――。だが、その二年後の春……。
リグルはいつものように、自警団とともに盗賊を追い払っていた。
仕事を片付け、いざ帰ろうとしたその時、盗賊の残党に取り囲まれ、そのまま捕虜となってしまったのだ。

そしてリグルは公開処刑の為、張り付け状態にされることに。

「父ちゃん……！　父ちゃん！！」

リグルは一瞬だけ我が子の方を向き、ニッコリと微笑みを見せる。
直後、リグルの胸を、処刑用の矛が貫く――。
――それが、ニッケルの見た、父の最期の笑顔だった……。

「奴らはリグルが逝った事を良い事に、しょっちゅう襲撃にやって来た。自分達に逆らう者を残虐までしよるようになってきた！　……わたし達大人は無力だ。リグルの代わりになることが出来ぬのだから。それ故、わたしの孫ニッケルの心から、リグルという英雄の姿を奪ったあやつらが憎いのだ！　だが、何も出来ない……力が無いばかりに。……悔しい事この上ない……」

村長は今も泣きそうに、涙腺を浮かべている。堪えているのだ。

一番苦しいのは村長でも、母親でも村の大人達でもなく……ニッケル本人なのだから。
――その時。

ガチャッ。

「祖父ちゃん！　何喋ってんだよ！　こんな奴ら相手に！」

村長の背後から、ニッケルが怒号を散らしながら、祖父に口出しする。

「これニッケル！　何て事を――」
「父ちゃんの事か！？　父親は勇ましかったのに、息子はどうしてこんなチキン野郎なんだってか！？　ああそうさ！　オレは父ちゃんみたいな男にはなれない！　ましてや、正義感を振りかざしている方が悪いのさ！　痛い目見るのを分かって歯向かうなんて、身の程知らずのやることなんだ！　最初から何もせず、奴らの好きなようにやらせておけば良かったんだ！　そうすれば皆死なずに済んだんだよ！　フハハハハ……オレの父ちゃんは英雄じゃない。ただのクソバカな――――」

バキィッ！

ニッケルの言葉を遮るように、彼に向かって振るわれた一本の拳が、右頬に激しく打ち付けられる！
殴ったのは村長でも滋郁でも零土でもなく――太陽だった。

ぶっ飛ばされた反動で、床に背中をおもいっきり叩きつけるニッケル。
胸倉を乱暴に掴み、太陽は性根の曲がった少年の顔を睨み付け、憤怒の声で言い放つ。

「父親は勇ましかったのに、テメーが何故臆病だぁ？　人間だからだよ……！　テメーは父親みてーになれない？　お前みたいなクソガキ、一生かけてもなれねーよ……！　身の程知らずだぁ？　好きなようにやらせるだぁ？　テメーが傷つくのが嫌なだけだろーが……！　オレの父ちゃんはクソバカ……？　お前がクソバカだ！！　このクソガキがぁ！！」
「も、もう止めときなよソル君。村長さんだっているんだよ？　それに、子供相手に……」

太陽の怒りを穏便に済まそうと零土が口を挟むが……。
一匹の獲物を見るような鋭い眼光に、零土の会話は途中で終わってしまう。
ニッケルの胸倉を掴んだまま、太陽はまだ話を続ける。

「テメェは英雄の息子でも、一人の男ですらもねぇ……！　ひねくれてばかりで動こうとしない、逃げるしか脳の無ぇ泣き虫小僧だ……！」

ニッケルにそう言い終えると、胸倉を掴んでいた手を乱暴に放し、火炎剣を背中に担ぐ。
そして太陽は、村長にキッパリと申し出た。

「村長さん、悪い。この話はもう終いだ。『俺は』先に帰らせてもらう」

太陽の突然の言葉に、滋郁が怒る。

「ソル！　オメー、村の人間を見捨てるっつーのかよ！？　オイラは許さねーぞ！」

「俺らの今回の依頼は、盗賊を潰す事だけだ。騎士様を潰す事じゃねぇ。……あばよ。こいつらはお前らがやれ」

捨て台詞を言い放ち、太陽は静かに家を出て行った。

太陽に殴られた頬を押さえながら、ニッケルは後から出てくる涙を拭う事に必死だった。

「……レだって……オレだって……父ちゃんみたいになれないって……分かってたさ……。それでも……オレは……憧れていたんだ……。どうして……オレは……人間は何時だって力が無いんだよぉ……」

泣きじゃくるニッケルを宥めようと、零土がニッケルの元へと寄り添う。

「……僕達は、ソル君の生い立ちなんてよく知らないけど……。一つ言えるのは、ソル君もきっと、君くらいの歳の時は弱かったんだと思うよ？」

「黒髪の兄ちゃんが……弱かった……？」

「うん。それに、僕やアスナちゃん、ジーク君だって、最初は弱い一傭兵だったんだ。でも、僕達が今こうして生きているのは、仲間の為に強くなろうと思ったからなんだよ。君のお父さんだって、家族を守りたいっていう思いで、力を手に入れたんじゃないかな？」

ニッケルが今こうして生きているのは、父リグルの雄姿のおかげ。

零土はそう口にした。

すると、村長が不安の表情で口を開く。

「しかし……黒髪の傭兵さんに帰られてしもうた……。どうすれば……」

「村長さん。ソル君は帰ったんじゃない。僕達にココを任せて、一人で敵地に乗り込んで行ったんだと思います」

「乗り込んだ……！　一人であやつらの根城にか！？」

「無茶すぎるぜぃ！」

「レイド！　早くソルを！」

滋郁と明日菜が急かすように、零土に押しかける。

と、その時だった。

「盗賊だぁ！」「うわあああぁぁぁぁ！」「きゃあああぁぁぁぁ！」

外から聞こえてくる村人たちの悲鳴。

夕方頃襲ってきた盗賊の一味が、また奇襲にやってきたのだ。

零土、明日菜、滋郁の三人はすぐさまに急行する。

すると突然、零土は立ち止まり、ニッケルに話しかける。

「――ニッケル君。行く前に僕から一言。人間は力が無いってソル君は言ってたけど、そんなことはないよ。拳を開いて見て。誰かを思う時、誰かを守りたいと思う時、そこに力は生まれるんだ。動いて始めて変わるものだって有る。……それを忘れないで」

そう言うと、零土はニッケルに背を向け、盗賊の方へと走っていった。

――薄暗い森の道。現時刻は二二時三十分。
オレは明日菜達を連れたりせず、一人ココを歩いている。

（……思い切って言ってみたのはいいんだけどなぁ……）

聞こえてくるミミズクの鳴き声と、肌に触れる夜風。
あいつ等があの村を集中的に定めているとしたら、巣のほうは付近にあるはず。
何で見つかんねぇ……。もしかすると、木の茂みにひっそりと立てていたり……。
そんな事を考えながら歩く俺の前に、団体さんがおいでなすった。

「へへへ……。兄ちゃん、こんな夜に散歩かい？」「夕方の時はお世話になったなぁ……」
「逃げ帰った腰抜けの残党か。数も少ねぇし、楽勝っぽいな」
「んだとクソガキ！？」「おれたち相手に一人でやるってか！？良いだろう！　殺した上で、首や内臓バラバラにして、『ケルディ海溝』に捨ててやんよ！」「殺っちまえ！」

口々に言ってくる残党共。五月蝿いったらねぇな。
火炎剣を両手に持ち、中腰になって奴等を向いてじっと構える。
野郎共がスゲェ勢いで、鉈を持ったまま俺に突っかかってきた。
それを狙い、中腰のまま俺は、居合いをするが如く、剣を横へと薙いだ！

「【火炎波】！」

一閃と同時に、剣に纏っていた炎が地を這うように、衝撃波となっ

て直進する！
火炎の波に飲まれた残党達。体を火炎に包まれ、燃え尽きていく。
太陽に、背後から斧で襲い掛かる下っ端。
火炎剣を握り、その下っ端に向かって居合いの一閃を入れた！

ザァン！

素早く振るわれた太陽の斬撃。その一閃で、下っ端の胴体は大きく吹っ飛んだ！
後から出てくる下っ端を、太陽は次々と薙ぎ倒していった……。

「呆気ねぇ……。もうこれで終いかよ……」

足元に転がっている焼死体や、斬撃で刎ね飛んだ首、腕、胴体などの部分。
血腥(ちなまぐさ)い場所をさっさと立ち去ろうと足を進めた――その時！

「おまえか？　我ら『ヴォルフ隊』に歯向かう輩は」

突如現れやがったボス猿。杖を片手に、腰には十個ほどの召喚石をぶら下げていやがる！
ビンゴだ！

「やっと出てきやがったか、ボス猿。……テメェん所の隊はシメーだ！　覚悟しなぁ！」
「覚悟するのはおまえだ……小童ぁ！」

ヴォルフっつー奴は、杖を地面に突き立てて詠唱しだした！

「【ブリザロン】！」

詠唱の終わりと同時に、魔力によって作られた氷の塊が、俺の方へと飛んできやがった！

だが、術自体の属性は【氷】だ。俺は即効で【炎の壁】を作り、その氷塊を溶かしてやった。

下級呪文なんぞにやられるかってんだ。

「ならば……これはどうだ！　【サンダ・マラン】！」

一直線に突き抜けてくる雷の閃光。今度は中級モンかよ！？

しかも早い！　くそ、もう一度盾を出してやらぁ！

「【炎の壁（フレイ・ウォール）】！」

僅かな時間で炎の壁を作った太陽。

だがしかし――次の瞬間！

「！？　貫通しやがった……！？」

雷の閃光は【炎の壁】を貫き、勢いを殺すことなく、そのまま太陽の方へと進み――。

ドシャアアァァァッ！

「ぐっ……がああぁぁぁ……！」

足を踏ん張らせ、仰け反りを回避する太陽。
火炎剣を盾にしていたおかげで、直撃は免れたが、流石の太陽も、中級呪文一発の全てを防ぎ切ることはできない。
剣の握りすぎと雷によって痙攣する両手、乱れる呼吸、踏ん張った反動で、まともに動かせない両足。
そういった身体の乱れが、太陽自身の体へと圧し掛かる。

「立っているのがやっとのようだな？　……まぁいい。苦しまぬように殺してやる！　【ボッガ村】のテロと同じように！」
「ボッガ……村……！」

故郷の名を語られた瞬間、太陽の忌まわしい過去が脳裏をよぎる！

──燃え盛る村の中。
少年はぐしゃぐしゃの顔で、父母を起こそうと必死に揺さぶる。

「父さぁん……！　母さぁん……！」
「太……陽……」
「生き……ろ……」
「居ないのかぁ……？　誰かぁ……居るって言ってくれ……」

両親や友の死に、絶望する少年。

「うわあああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

少年はただ、家が燃え盛る劫火の中で泣き叫ぶしか無かった……。

「お前……今、地獄に一歩踏み出したぞ……」

「？」

太陽は憤怒の声で、ヴォルフに小さくそう言い放った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7194z/

raising sun ―ライジングサン―

2011年12月23日23時50分発行